

大人の「膝」、そして「隣にいる」ということ

神奈川県の委託事業として3年間続けてきた、A町の貧困家庭の子どもたちに対する学習支援活動が、3月21日の子どもたちとのお別れ会を持って終了した。3年間という短い期間ではあったが、その間スタッフの事情などから、支援体制が二度ほど変更となり、なかなか安定した支援を提供できなかったことは申し訳なく思っている。しかし2018年度に関しては、スタッフの人数は多くはなかったものの、継続的な支援をおこなえたと総括しているし、子どもたちとの関係も深めることができたと考えている。Ed.ベンチャーの総会では、毎年取り組みの概略を報告しているが、終了に当たり、Ed.ベン便りの紙面を借りて、何点かに絞って報告をしたいと思う。

入学式の制服

支援は毎週水曜日におこなわれていた。昨年4月、入学式前日が第1回目の支援であった。この日は、申込書を渡しながら、この教室のルールや活動内容を説明した。参加者のすべてが外国籍の子どもたちであった。この教室では以前から、「貧困家庭児童生徒への学習支援」＝「外国人の子ども支援」という構図になっていた。そもそも対象者に外国人の子どもたちが多いことから、Ed.ベンチャーに委託の話が持ち込まれたという経過があることから、学習支援の枠にとどまらず、幅のある支援を子どもたちが求めるだろうことを覚悟しての取り組みであった。そんなことから、学校で困っていることや、友達のこと、家庭の出来事など、折りにつけ、子どもたちから「声を聞き取る」ことを心がけていた。

この日は明日に迫った入学式について、中学1年生になる子どもたちに聞いてみた。「制服や上履きはそろってるの？」答えは、3人中2人が「NO!」。「エッ!どうするの?」。生活保護費から、入学のための準備金は渡されているはずだ。慌てた様子もなく、子どもたちは答える。「親がまだ半額しか払っていないから、入学式の朝にお店に行って、残りのお金を払って制服をもらうことになってる」のだそうだ。「大丈夫なの?」「わからない・・・」

次の週、ことの顛末を聞いてみると、案の定、制服はなんとかもらえたけれど、入学式にはとても間に合わなかったようだ。これがかれらの中学校生活の初日である。入学式から遅刻してくる生徒に対し、担任の先生はどのような印象を持ったのだろうか。また、遅刻せざるを得なかった事情を、ゆっくり聞いてくれたのだろうか。子どもたちは、中学生生活の初日から、学校生活に「のる」ことはできなかったことは確かだ。

膝の上

とにかく落ち着かない。勉強をしている子どもでも、集中しているとは全く言えない。「宿題やる」といってもせいぜい答えを写していることが多い。「自分で考えてやろうよ」と声をかけても、「これでいい」と言って聞いてくれない。写し間違いを指摘しても、「かまわない」というのだ。こうした子どもはまだまして、小6の男の子は、来ていることをアピールしながらも、廊下に行ったり、入り口で寝転んだりして教室に入らない。おまけに声をかけても無視!中2の男の子は、暴れ回ったり、たまに静かだと思うときは筋トレをしている。また、同じく中2の男の子は、スタッフの顔さえ見れば、「死ね!あほ!」と悪態をついてくるのだ。支援活動やボランティア活動という、なぜか美しい映像が浮



かぶが、決してそんなことはない。こうした状況を一人のスタッフが2人から3人を受け持つことから、正直疲れるし、水曜日になると、行くまでは気が重いのも事実。

それでもこの一年なんとかやってこられた。しかも、最後には、どの子どもも勉強にしっかり臨む姿勢も少しは見られた。では、なぜスタッフは頑張れたか？それは簡単だ。子どもたちが休まないからだ。子どもたちの家から教室が開催される会場までは30分程度かかる。近いとはいえない。結構ひどい雨が降っていても、子どもたちは教室に来てくれる。休まないのだ。こうなると、スタッフたちも考える。「子どもたちは、いったい何を求めてこの教室に来ているのだろうか。」そしてやがては、「すべてを許しながら、ゆっくりつきあうこと」がスタッフの共通認識となった。もちろん注意もするし、勉強への声かけもする。でも、ひどく叱ることはないし、「暴れるならもう来るな」とも言わない。おかげで、教室をお借りしている会館の管理の方からは、ずいぶんと叱られた。「責任者はどなたですか？静かにさせてください」と。

それでも教室のルールはある。休憩の時間帯、振り返りの記録、終わりの会は全員で、帰りには会館の事務所にみんなでお礼の挨拶・・・など。

秋の頃から、はっきり子どもの変化が感じられるようになった。雰囲気落ち着いている。お互いが無理な干渉もなく、気を遣い合っている。スタッフとの距離もずいぶん近くなったようだ。

この頃面白かったのは、終わりの会の最中、中2の男の子が、年配の男性スタッフの膝の上に座っていたり、小6の男の子が、別の男性スタッフの膝枕で、マツタリしている姿が見られたことだ。子どもたちにとって、ちょっぴり特別な空間になれたのかもしれない。

「隣にいる」ということ

ちょっとばかり前の話だが、東日本大震災の支援にEd.ベンチャーが毎週取り組んでいた時期があった。そのときの子どもたちも8年がたち、大きく成長した。今でもつながりは切れずに、必要なことがあれば、その時々のお手伝いは続いている。

東北大震災の直後、本当に多くのボランティアが被災地に入った。きっと被災した人々にとっては、大きな手助けとなっただろうと思う。しかし、子どもたちの支援を続けている中で、首をかしげてしまうボランティア団体に出会ったことも多くあった。まさしく、自己満足のために被災した子どもたちを利用して、「善意？」を押しつけているとしか思えないようなこともあった。子どもたちもよくわかっているようで、「あいつらは、はやりで来ているだけ・・・」と言っていた。しかし、その「あいつら」と「わたしたち」が違う保証は全くなかった。私たちには、何ができるのか！そのとき私たちが出した答えが、「隣に居ること」「隣に居続けること」であった。

今回のA町での支援も、同じ結論がスタッフの胸に結ばれたように思う。私たちに、たいしたことはできない。でも、せめて子どもたちの「隣に居る」存在でありたいと思ってきた。

地元

スタッフの人数は今年よりも厳しくなるけれど、子どもたちに「膝」を提供するために、4月からの教室に覚悟を決めたところだったが、思いがけず、地元の人材を集めて委託を受けたいという団体が現れた。

子どもたちが出会っている多くの生きづらさは、生活そのものだ。できるなら、地元の人たちがその思いを引き受けてくれることが、少しでも解決につながることでスタッフ内では話していたところだった。外国人のこの子たちを、地元にも受け入れる場所が広がることは本当にうれしいことである。

しかし、子どもたちが何かの都合で、いつか私たちが必要とするときがあるならば、「教室」という形ではなく、「隣に居続ける」ことを迷わずに選択したいと思っている。

理事のつぶやき 学校の卒業式の季節となった。卒業する子ども達にどんな言葉を掛けたか、ふと10年も前のことを思い出していた。忘れたのではないが、出てこない。心から掛ける言葉が見当たらなかった。だって「君たちには輝かしい未来が・・・」なんて、口にするのができなかつたことだけは記憶に残っていた。まして今や、子ども達の痛ましい事件を思うと眠れなくなる。柏の事件といい、先日は11か月の子の首に浮き輪をつけて風呂に浮かべ、脱水症状で亡くなった事件。父親は携帯でゲームをする時間が欲しかったと。全く話にならない。何があっても守ってくれるはずの親達に殺されるとは。子ども受難の世の中になったのか。何のために生まれてきたのか、何のために親になったのか、亡くなった子ども達はきっと叫んでいるにちがいない。(T.T)